

## これまでの会議で出された意見

### ～市立幼稚園の在り方に係る4つの視点～

本資料は、これまでに開催された市立幼稚園の在り方検討会議において、市立幼稚園の在り方に係る方針の策定に向け、今後検討を進めていくべき視点ごとに出された主な意見を整理したものです。

## ～ 4 つの視点～

### 視点 1 時代に即した幼児教育の展開

- 1－① 多様化する教育・保育ニーズへの対応
  - 新制度の実施や幼児教育の無償化により、求められる質の高い幼児教育への対応
  - ニーズが高まっている長時間の保育への対応

### 視点 2 札幌市の幼児教育の質の向上

- 2－① 幼児教育施設の教職員の資質向上
  - 幼児教育施設の人材育成、資質向上
- 2－② 幼児教育施設の教職員への支援体制の整備
  - 幼児教育施設の支援体制の整備

### 視点 3 特別支援教育の充実

- 3－① 一人一人の状況に合わせた適切な幼児教育の提供
  - 個々の幼児の教育的ニーズに応じた指導内容や指導方法の充実
  - 障がいのある幼児とない幼児が共に遊び、学ぶ機会の効果的な設定
  - 特別支援教育に関わる研究成果の発信や研修機会の提供

### 視点 4 幼保小連携の推進及び家庭教育支援の充実

- 4－① 幼児教育施設間、学校段階間の相互理解と円滑な接続
  - 幼児教育施設間および小学校との相互理解の促進
  - 幼児期と児童期の教育課程の接続に向けた支援
- 4－② 家庭教育支援（子育ての支援）の充実
  - 地域における幼児期の教育のセンターとしての子育ての支援の充実

## 視点1 時代に即した幼児教育の展開

### 1-① 多様化する教育・保育ニーズへの対応

○新制度の実施や幼児教育の無償化により、求められる質の高い幼児教育への対応

#### 【市立幼稚園の機能や実践研究の推進について】

- 公立園の機能は何かと考えたとき、研究の機能は外せない。幼児教育についていろいろと分かるようになったのは、縦断的な研究が可能になったからであり、縦断的な研究には、情報が集約されることが必要。公立園や幼児教育センターが中心になって研究を主導し、全体の情報を集めながら、発信をしていくことが必要で、私立が行う場合かなりの負担となる。
- 市立幼稚園、幼児教育センターと、教育委員会の組織の中にある機能があって初めて、私立幼稚園と連携して、これからの幼児教育の無償化時代に必要とされる幼児教育の質の議論ができるのではないか。
- 幼児教育センターが発足し、このような形で機能している市がそもそもほとんどない状況で、札幌市の幼児教育センターという機能は全国的にもモデルになっており、形だけの機能ではなくて、市立幼稚園という実践する場があって、そこで経験を積み重ねてきた先生方が指導主事という形で勤務し、先頭に立って、幼小の接続や研究・研修事業を行っている。
- 市立幼稚園では、保育園ではなかなか行うことができない研究事業を進め、それを発信し、札幌市の幼児教育の質の向上につなげてほしい。
- 実践研究の質の変容については、研究を続ける上で時代背景や環境が変わって研究の質が変わるのは当たり前のことだと思うが、研究を続けることにより、時代の変化によって影響が出てきたことが分かることもある。その変わってきた研究の質をより生かすためにも、ニーズの把握は力を入れてやらなければならない。

#### 【市立幼稚園の研究実践園としての役割や規模について】

- 市立幼稚園を廃止するという考えではなく、今ある機能をさらに向上させるような取組が今後必要ではないか。

- 少子化が進む中、幼児教育の無償化によって、幼児教育施設の利用者の選択の幅が今後広がり、市立幼稚園に通う園児が少なくなるということは考えなくてはならない。
- 園児数が多くても少なくても、研究実践園としての幼児教育の実践研究はできると思うが、園児数が減ることによって、子どもの育ちに関わる人が少なくなることは押さえなければいけない。粘り強さや、仲間と協力して問題を解決する力などの非認知的能力が大切であり、そういったものはある程度の集団規模の中でなければなかなか育たない面があると感じている。
- 一定の集団規模を維持できる方策として、例えば幾つかの園を集約するということも考えられるのではないか。その場合、各幼稚園の置かれている実態や区の実態、近隣の幼児教育施設の様子なども勘案して慎重に判断しなければいけない。
- 定員充足率の低下による集団の規模や年齢構成の変化に伴う話があったが、小規模園には小規模園の良さや課題があり、大規模園は大規模園の良さや課題がある。小規模園であれば、子どもたちの育ち合いが刺激として少ないのではないかという懸念については、例えば、園外の人々、地域の人との関わりの中で子どもたちをどう育てていくのかといった研究もできる。
- 子どもたちの関わりの中から、もちろん、小さな規模の中でも得られる成果はあると思うが、研究をベースとした場合、この程度の園児数が必要という決まったラインのようなもの、幅はあると思うし、実態とかけ離れていると研究にはならない。
- 子どもにとっての園児数もそうだが、教諭を育てるうえで必要な園児数もあり、最低限、この程度の園児数はないと教諭が育たないということもあると思う。
- 市立幼稚園が全市で1園だけでは難しいが、幼稚園の先生たちを育てていくという観点も必要で、単なる統廃合に向かうのではなく、バランスを考えながら、一体どれぐらいの規模がなければだめなのか、そのためにはこの程度の園数が必要だということを考えていく必要がある。

## ○ニーズが高まっている長時間の保育への対応

- 預かり保育の時間も遊びを通した大事な教育・保育であると考えて計画的に行うことが大事である。教育時間、その後の預かり保育の時間と、子どもの姿の異なる点がたくさん見えるし、成長も見えてくる。
- 長時間保育への保護者のニーズが高くなっていることを感じており、市立幼稚園も長時間保育に対応していくことになると思うが、そこで問われるのは、預かり保育をする保育士の質の向上ということ。幼稚園教育の実践から生まれる確かな保育力を、どのようにして預かり保育をする保育士と共有して、質を高めていくのかが課題である。また、長時間保育は、教諭の負担増という問題もあると思うので、そうならないような手立てが必要。
- 長時間保育への対応は、幼稚園教育要領の改訂に伴い、教育時間の終了後に行う教育活動という点がしっかりと明記されており、実践を行う必要があるということが示されているので、先導して、研究実践して進めていくのが市立幼稚園の使命と役割である。
- 長時間保育を推進するということではなく、保護者の都合によってどうしても長時間保護者のもとを離れなければいけない子どもにとって、より良い環境、より良い過ごし方、発達を促すための必要な経験は何なのかということについて、市立幼稚園が中心となって、これからも積極的に進めるという点が必要ではないか。

## 視点2 札幌市の幼児教育の質の向上

### 2-① 幼児教育施設の教職員の資質向上

#### ○幼児教育施設の人材育成、資質向上

- 保育士不足の中、市立幼稚園と同じように保育所の研修をすることはなかなか大変な状況だが、市立幼稚園で行われる公開保育を見に行き、幼稚園ではどんな実践をしているのかを学び、それを園に持ち帰ってできることをやってみようと実践に生かしている。
- 質の高い幼児教育を行うには、教職員の質の向上はイコールであると考えており、研修の重要性、必要性を年々感じている。また、時代の流れが早いので、基本的な理念は変わらなくても、時代に即した研修が必要。
- 市立幼稚園の先生が、出前講座のような感じで、支援の必要な幼児のことなど、現場の先生たちが研修できるような機会を設けてもらいたい。

### 2-② 幼児教育施設の教職員への支援体制の整備

#### ○幼児教育施設の支援体制の整備

##### 【幼児教育支援員による支援について】

- 幼児教育支援員は、私立幼稚園の先生方の教育相談に応じるため、訪問支援をしているが、保育所を支援する役割になっていない。今後、保育所も含め、保護者の皆様や保育士たちの特別支援教育に関わる支援を幼児教育支援員が携わっていけるように、子ども未来局、他部局との連携の中で、広がっていくと良い。
- 幼児教育支援員は、保護者からの相談窓口を担い、子どもたちの支援を考えていく点に関しては、存在が身近で、私立幼稚園との連携も取りやすく、子どもたちにとっての支援がより良いものになるということを、これまでの実績から、本当に実感している。
- 私立幼稚園は私学という経営の中で教育を行っているため、幼児教育支援員のような立場に立って保護者の支援をしたくてもなかなかできない。

- 保護者にとって、第三者として話を聞き、親身になってくれる存在が園以外にあったことがとても役立ったので、幼児教育支援員の機能がもっと充実したほうが良い。
- 幼児教育支援員が、幼稚園に訪問し、支援を必要とする子どもをアセスメントし、関わり方のアドバイスをするという点に関して、アセスメントのみで終わり、関わり方のアドバイスがないまま、翌年度になるような状況が起きている。
- 幼児教育支援員が10区で10人いるが、年々支援を必要とする子どもの数が増加し、支援員が1人で見ると子どもの数がどんどん増えているので、私立幼稚園の関係者のほとんどが、幼児教育支援員の数が現状で不足していると思っている。
- 札幌市の幼児教育の質のさらなる向上を考えるのであれば、幼児教育支援員を各区2人に増員し、保育所も含めて札幌市全体の支援を必要とする子どもの支援体制として、市立幼稚園が窓口になり、幼児教育センターがまとめて、小学校にしっかり接続していく必要がある。
- 保育園では、発達障がいや発達に課題のある子どものことについて、幼児教育支援員とともに検討するなど、公立幼稚園と連携を取っている。保育士も、幼児教育支援員の存在を心強く思っているので、幼児教育支援員が不足していることについては、発達に課題のある子どもが増えている中で、各区に1人だけの配置でいいのかと思うし、もっと増員を考えていただきたい。
- 認定こども園では、幼児教育支援員が1号認定の子どもしか対応しないといった点があったので、2号認定の子どもも一緒に見ていただけるようであれば、ありがたい。
- 幼児教育支援員を増加して1人当たりの訪問や交流、支援で訪れる回数を減らすことによって、1回の訪問の内容を充実させる取組を活性化していくことも考えていかなければいけないと思う。それが、幼児教育施設の職員の質の向上にもつながるのではないかと。

- 幼児教育支援員は、各区に1人ではかなり少ないという点は一致しているので、これをどのように拡大していけるのかというところは、予算との絡みもあるが、考える必要がある。支援員が1人だと孤立してしまう可能性があり、情報のやりとりが重要になるので、複数体制も検討課題に加えてほしい。

#### **【市立幼稚園教諭の確保や幼児教育支援員の育成について】**

- 市立幼稚園の今ある機能の重要性や子どもたちや保護者のことを考えたときに、もっと機能を充実させることに考えをシフトしていくのは自然ではあり、幼児教育支援員の質をさらに向上してほしい。
- 市立幼稚園の採用が15年ぐらい行われていなく、幼児教育支援員の質が今と同様かそれ以上を求める時代に入ってきている中で、継続できる事業なのか、私立幼稚園ではかねてから不安に思っている。
- 幼児教育支援員は、必要性がある事業なので、その質を今まで以上に向上してもらうためには、直ちに採用を再開し、採用した市立幼稚園の先生方に研鑽を積む場として、私立幼稚園と一緒に研修、研究を行うなど、教員の質の向上を図るような仕組みをつくる必要がある。
- 正規職員の採用がない状況下では、今後、職員が少なくなっていくことが懸念されるので、できるだけ早く採用を行い、どうすれば幼児教育支援員の数を増やすことができるのか、真剣に考えなければいけない。



### 視点3 特別支援教育の充実

#### 3-① 一人一人の状況に合わせた適切な幼児教育の提供

##### ○個々の幼児の教育的ニーズに応じた指導内容や指導方法の充実

##### 【幼稚園における教育相談について】

- 市立幼稚園がしっかりあることで、そこで研鑽を積まれた力量のある保育者がそこにいるから教育相談が成り立っていると思うし、実践が伴わない教育相談の場はないと考える。
- 各区の市立幼稚園で行われている教育相談を活用し、私立幼稚園に通う子どもたちの支援や保護者の相談を行った上で、私立幼稚園と連携し実際の生活の中で先生方の関わり方に生かしていくということが行われており、札幌市内の私立幼稚園は、このシステムが保護者との安定的な関わり方に役立っているということを実感している。
- 保護者に対し、どのような支援をしていくべきか、就学までどう歩んでいこうかという相談をするとき、市立幼稚園に相談してもらって、一緒に話をしていくことができるような環境があるのが、保護者にとっても、保育園にとっても一番望ましい。
- 保護者は、児童相談所や病院関係に子どもを見てもらうとなると構えるが、市立幼稚園の中で見てくれることを伝えると、行きやすいという思いがある。保育園も市立幼稚園で見えていただいて、今後につなげていきましょうという形で話しやすい。
- 支援が必要な子どもが増加していく中で、現場の先生たちの一番の悩みは、保護者とどう連携し、どう支援するかが重要であり課題である。
- 幼稚園につながるときに、親は、子どもに問題があるかもしれないという緊張状態にあり、結果がとてもショックを受けるような内容で受容に時間がかかるかもしれない場合に、家庭をフォローしていただける力を市立幼稚園や在籍の幼稚園、保育園の先生がもっているととても助かると思う。

- 市立幼稚園にある教育相談の窓口について、相談を受けた子どもに発達心配があった時、幼稚園や保育園の担任の先生だけに任せない体制をより強化していただくことを望みたい。
- 園生活を見ている、そして、保護者の気持ちも知っているという点で、子どもと保護者を一体的に受け止めてくれるような相談体制があれば、保護者が療育にも前向きになれると思う。先生と保護者と子どもがつながっていると良いのではないか。

#### ○障がいのある幼児とない幼児が共に遊び、学ぶ機会の効果的な設定

- 市立幼稚園で行ってきたインクルーシブの環境を小学校での適切な教育に引き継ぐことによって、その子の可能性が広がることを目の当たりにしたので、そのことが各幼児教育施設へ波及していくことを期待している。
- 幼児期から小学校において、みんなで生活しながら楽しい社会にしていくということが重要だと思う。その入口としての幼稚園というのはインクルーシブの一番大事な場面である。
- 支援を必要とする子どもは、多くの園児と一緒にいることによって大きく成長するのではないかと思う。さらに、専門家がついてアドバイスをすることによって変わっていくのではないか。

#### ○特別支援教育に関わる研究成果の発信や研修機会の提供

- 私立幼稚園が、人員の配置や運営費の問題等でできないところに関して、市立幼稚園が行っている取組は、子どもたちや保護者のためになっているので、このような研修機会、研究成果の発信、共有という点に関しては十分成果を上げられていると感じている。
- 特別な教育的支援を必要とする幼児の支援担当者研修は、内容が充実しており、参加して得られたことが園の中で生かされているということ、各園の先生方からも耳にする機会が多い。
- 区の中でも連携を取りながら、私立幼稚園主催の研修会の講師にも幼児教育支援員に来てもらい、発達検査の方法等を教えてもらっている。また、市立幼稚園で、実際に支援の必要な幼児へこのような関わり方をしているとか、このような教材を使っているとか、そういった情報提供をもらっている。

- 私立幼稚園の教員に対して、個別の教育支援計画や指導計画の作成等について適切な援助を受けながら、どのように一人一人に応じた関わり方を模索すればいいのかという点で大変助かっている。
- 小学校に対しても、市立幼稚園の園長先生や支援員の先生から、サポートファイルさっぽろを保護者や関係機関との連携で活用していることを伝えてもらえれば、サポートファイルの活用などが広まっていくのではないか。その役割を市立幼稚園に担ってもらうことを期待したい。
- 障がい児に関わる支援計画の立て方も、専門的な技能や知識が必要になり、研修などの深い部分、専門的な研修などが必要になってくると思う。研修の回数、時間だけではなくて、密度の部分も注目した研修の組み方をしていただきたい。
- 特別支援教育コーディネーターは重要な立場なので、問題をたくさん抱え込んでしまい、どうしていいかわからなかったり、自分の知識・技量や物理的な時間の問題が存在したりすることについて、相談を受けることが多い。スーパーバイザーのような立場の方がいると、問題の抱え込みを防ぎ、資質の向上という部分にも寄与すると思う。資質の向上は、モチベーションの向上にもつながっていくので、そういう取組がないのであれば検討してもいいのではないか。
- 札幌市で発行している発達障がいのある方たちへの支援のポイントをまとめた冊子の「虎の巻シリーズ」を、小学校だけではなく、幼稚園にも配ってほしい。

## 視点4 幼保小連携の推進及び家庭教育支援の充実

### 4-① 幼児教育施設間、学校段階等間の相互理解と円滑な接続

#### ○幼児教育施設間及び小学校との相互理解の促進

##### 【幼保小連携の推進について】

- 幼保小連携は、私立幼稚園・保育園に札幌市内のあらゆる地域から園児が来ていることを考えると、私立園だけでは対応に限界があり、市立幼稚園が率先して窓口になってもらわなければ難しい。また、市立幼稚園が窓口になって各區で連携ができているということだけではなく、幼児教育センターという取りまとめをする機関があるということが大きい。
- 幼保小連携の取組は、幼保小連携推進協議会と幼保小連絡会の2点の柱があり、10年ほどの取組の中ですごく充実してきているが、幼児教育センターと市立幼稚園という窓口があったから、このような機会が設定されたということを実感している。
- 幼保小連携に関し、年3回の会議を開催しているが、実質的には1回は幼児の情報の引継のみで、効果的に機能としているとは言い難く、これから、さらに幼保小連携の取組を充実していくためには、もう少し改善した方がいいと思う。また、研修も行われるが、短い時間で中身がなかなか深まらないので、さらに小さなブロックの中で研修をできたらいいのではと思う。
- 地域に根差した在り方ができる市立幼稚園が、小学校との連携のモデルとなり、他の幼稚園や保育園が実際に小学校とつながることができるような取組を期待したい。
- 小学校では、子どもが学びやすいようにいろいろな指導をして、学びをスタートさせるということに力を注いだ面があるが、それになじめない子がおり、この協議会で幼保小が互いの教育を知り、滑らかな接続へつなげてきている。小学校を含めていろいろな施設がしっかりと子どもの実態を把握して、支援体制、バックアップ体制をとることが大事である。
- 幼稚園児の小学校への訪問というのは、次の世代にバトンタッチするという意味では大事な行事だと思うので、続いてほしいし、そういうことを通じて、地域全体で交流を活発にしていきたい。

### 【幼保小連携に関わる教職員体制について】

- 幼保小連携が始まってから、顔が見える体制になり、連携がとりやすくなったが、まだまだ不十分なところがあり、より連携を深めることが課題である。また、進学先によって取組に対する差があるので、皆さんが熱意をもって幼保小連携に取り組むことができるような研修をしてほしい。
- 幼保小連携推進協議会のメンバーに、校長先生だけではなくて、学校に長く在籍する先生が参加できれば、その先生が次の学校に異動しても、その先生が教頭先生や校長先生になっても、続いていくのではないか。また、管理職の先生だけではなく、他の先生も協議会の場に出られるような機会があればいいと思う。
- 小学校と幼稚園の人事交流が、もっと盛んに行われると良いのではないか。

### ○幼児期と児童期の教育課程の接続の充実に向けた支援

- 幼保小連携の取組を推進するに当たり、教育課程の接続がどのように行われたのかという検証まで行うとか、幼保小の接続が子どもの姿にどう影響して変化していったのかという検証をしていく必要がある。
- 教育課程の接続の検証に関して、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を切り口にするなどして、市立幼稚園がモデルとなって先進的に取り組み、幼児期の遊びの中での学びが、小学校で教科の学習につながるという検証を行ってはどうか。
- 幼児期に育む資質・能力を三つの柱で整理したこと、その内容や育ってほしい姿については、これからも幼保小の交流を通してお互いが研修して、より深い理解のもとに、就学してくる幼児の実態に即したスタートを各小学校が切れるようにしていかなければいけない。
- 関係機関と連携して、研究の成果又は実践の事例として蓄積して、それを世の中に啓発し、発信していく役割は、市立でないといけないと感じている。市立幼稚園であれば、地域の中心的な役割を担っていることもそうだが、大学や研究機関との連携という面でも結び付きやすいので、検証等も可能だと感じている。

## 4-② 家庭教育支援（子育ての支援）の充実

### ○地域における幼児期の教育のセンターとしての子育ての支援の充実

#### 【幼児教育に関する理解や啓発について】

- 市立幼稚園では、保護者への幼児教育の理解や啓発に関して、懇談等、様々な機会を通してこれまでも取り組んでいるが、さらに充実してほしい。
- 各幼児教育施設の単位でも、子ども・子育ての支援はいろいろな方法を模索しながら行っているが、保護者への幼児教育の理解や啓発に関しては、私立幼稚園等の一園単位では難しく、市立園 10 園の力と幼児教育センターという札幌市のセンター機能を使って、市全体にどれだけ幼児教育が大事なのかを発信していくべき。
- 札幌市は、「子育てしやすいまち」を掲げているが、それは、待機児童対策として、単に箱物を作るという考え方ではなく、子どもたちにとって良質な環境や、どのような過ごし方が必要なのかという質の部分に関して、市立幼稚園、幼児教育センターが中心となって理解と啓発に努める必要があると考えている。
- 家庭での育て方にも影響する支援の仕方というのは、先生方の専門性、技術だと思っており、技術を継承していく、醸造していく、伝えていくというのが幼稚園の役割の一つであり、これを途切れさせない中核となる存在、情報を発信する存在となる市立幼稚園の役割は大きい。

#### 【保護者に対する支援について】

- 他者と話すことで、育児で迷っていることや悩んでいることが全て解決できるわけではないが、少しは改善できたり、安心したり、他の子と接することで自分の子だけではなく、他の子のいろいろな発見もあり、心に余裕ができることもあり、保護者も楽しく育児をできるような環境を考えていくことも大切ではないか。
- 園のPTAが、各区のPTA連合会に加入し、区P連の行事に参加することでたくさんの保護者と関わるができるし、小学校の情報や、場合によっては中学校の情報まで聞くことができる。

- 幼稚園への送迎のときに、困ったことや不安に思ったこと、ちょっとした伝えておきたいことなどをすぐに幼稚園の先生へお知らせして、情報共有して、話し合える環境にあるのがとても良い。また、日々の遊びの様子や学級活動の取組を、写真を活用して園の玄関に掲示してくれるので、日々の様子が先生の言葉や写真から分かるということは、保護者にとってとても安心感がある。
- 母親としての立場では、他の家庭や保護者の話を聞いて、自分だけの独自の家庭教育を見直したりするようなこともあり、子どもだけではなく保護者の社会性の向上においても、幼児教育施設での生活はとても意義が大きい。
- 保護者のストレスマネジメントも役割として意識すると、市立幼稚園の役割がより強化できるのではないかと。
- 地域のボランティアとして、ポロップひろばに関わっているが、地域が園を通して保護者にも関わり、いろいろな話をしていきたいと思っている。
- ポロップひろばで子育ての情報を得て、子どもを遊ばせながら、気軽に教育相談ができるという面では大切な場になっていることを私も見て感じており、これからも充実したものになるように継続してほしい。
- 『さっぽろっ子「学び」のススメ』というリーフレットが、市立幼稚園だけに配られていることを初めて知ったので、私立幼稚園にも見ていただいて、ぜひ各家庭で活用してほしい。